



CONTENTS

学長挨拶	P2
センター長挨拶	P3
キックオフ・シンポジウム	P4
センター概要	P10
ユニット紹介	P11

動画で研究紹介をしています

本ニュースレターの『KU-ORCAS』ロゴに端末をかざすと、
研究メンバーの研究紹介動画をご覧いただけます。

▼ご利用方法

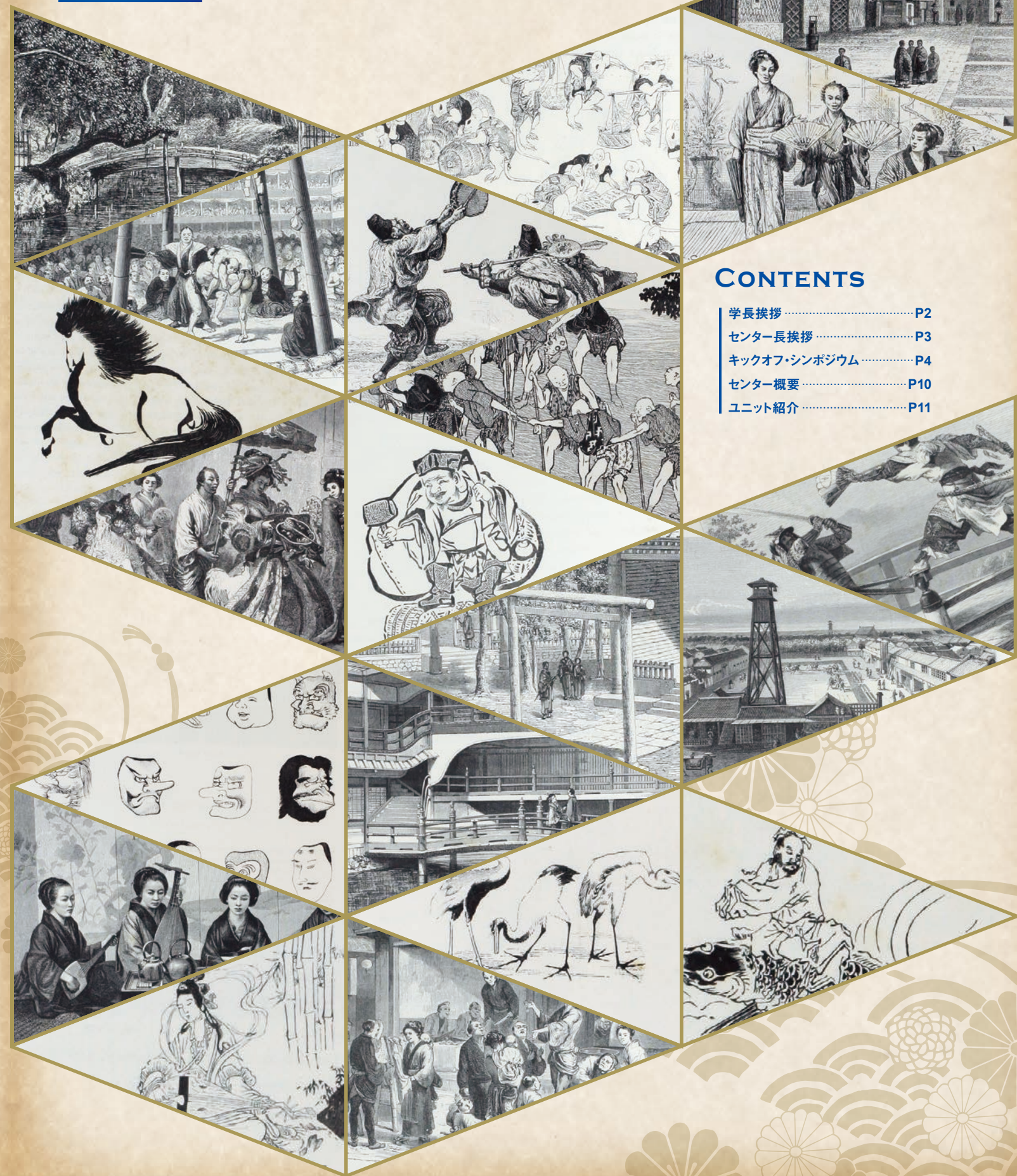
- ① AR無料アプリ「COCOAR2」をダウンロード



■iOSの場合
「App Store」で「COCOAR2」と検索するか、QRコードからダウンロードしてください。
※互換性:iOS7.0以降、iPhone、iPodおよびiPad対応。

■AndroidOSの場合
「Google Play」で「COCOAR2」と検索するか、QRコードからダウンロードしてください。
※Android要件:4.0以上。

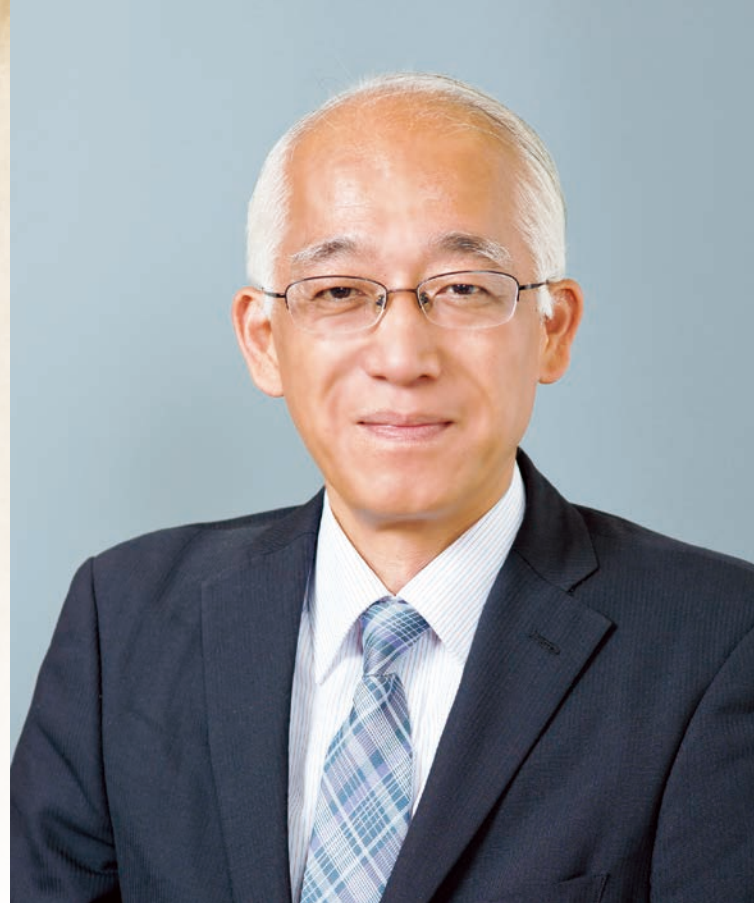
- ② アプリを起動して、対象画像に携帯端末をかざす



学長挨拶

関西大学学長

芝井敬司



関西大学アジア・オープン・リサーチセンターの 開設によせて

このたび2017年度の私立大学研究ブランディング事業に「オープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究」が採択されました。

今回採択された「私立大学研究ブランディング事業」は、採択率は32パーセントでした。この事業は、「学長のリーダーシップの下、大学の特色ある研究を機軸として、全学的な独自色を打ち出す取組」として採択された私立大学に対して、経費支援を行うものです。

さて、今回の事業課題のメインとなっている「関大の東アジア文化研究」は、大阪市内にあった代表的な漢学塾である泊園書院にその起源を求めることができます。戦後になって、泊園書院から2万冊の漢籍を中心とした蔵書を継承した関大は、最初の学術研究機関として、1951年に東西学術研究所を学内に設置しました。また、文学部には東洋文学科も設置されて、活発な教育研究活動が繰り広げられました。

東西学術研究所は、やがて2005年度私立大学学術研究

高度化推進事業の「オープン・リサーチ・センター整備事業」に選ばれた「東アジアにおける文化情報の発信と受容」、2007年度グローバルCOEに採択された「東アジア文化交渉学の教育研究拠点形成」、2011年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された「東アジア文化資料のアーカイヴズ構築と活用の研究拠点形成」などの母体となり、21世紀にはいつてからは途切れることなく大型の研究助成を受けて、旺盛な研究活動を展開してきました。さらに、注目すべきはこうした活動が新しい大学院の設置に結びついたことです。2011年には東アジア文化研究科が設置され、そこにはアジアから多くの大学院生が集まって熱い研究指導を受けてきました。

私たち関西大学は、東アジア研究の長い伝統と近年の目覚ましい実績に基づいて、これから「デジタル技術に裏打ちされた東アジア研究のオープン・プラットフォーム」を形成しようとしています。この意欲的な試みに一層のご関心を寄せていただけることを期待しております。

本学は、江戸時代、大阪の地にあって当時の市民の教養形成に大きな役割を果たしてきた漢学塾「泊園書院」をその源とする関西大学東西学術研究所を中心に、東アジア文化研究においてこれまで大きな成果を挙げてきました。とりわけ、近年のグローバルCOEプログラムなどにおけるめざましい研究業績により、すでに「東アジア文化研究の関大」「関大と言えば東アジア研究」として世界的な認知を受けてきています。また、このグローバルCOEプログラムで私たちが提唱した新しい学問体系である「東アジア文化交渉学」およびその方法論の一つである「周縁からのアプローチ」は、いまや世界の学問研究の主流とも言えます。あわせて、本学総合図書館の個人文庫を中心とするコレクションや博物館は世界に誇るべき東アジア関係資料の宝庫であり、それらのデジタル化もすでに相当量が公開され、そのノウハウも蓄積されています。そうした面においても、本学の貴重な資料群は、世界の研究者の垂涎的となっています。

今回、私たちは、こうした200年にわたる長き学統の中で培われてきた「関大の東アジア文化研究」の学術リソースと国際的学術ネットワークを基盤として、「関

KU-ORCASの目指すもの



関西大学アジア・オープン・リサーチセンター長

内田慶市

センター長挨拶

西大学アジア・オープン・リサーチセンター（Kansai University Open Research Center for Asian Studies : KU-ORCAS）」を立ち上げました。

本センターでは、デジタル知識基盤社会に適合した人と世界に開かれた「デジタルアーカイブ」の構築を中心として、同時に、研究リソースのオープン化、研究グループのオープン化、そして、研究ノウハウのオープン化という「3つのオープン化」のポリシーのもとに、これまでの学問領域や人の垣根を越えた新たな人文知の創造に向けて、世界に開かれたハブ的機能を備えたオープン・プラットフォームを形成し、「世界的な東アジア文化研究を牽引する大学」として、世界最高水準の東アジア文化研究拠点を形成すべく活動していきます。

KU-ORCASは、まさに世界のすべての人、すべての学域に開かれた空間です。私たちは、ここから世界の東アジア文化研究と人文学の新しい地平が切り拓かれるものと確信しています。

多くの知恵と力を結集して、KU-ORCASを世界に冠たるアジア研究拠点にしていきたいと願っています。



キックオフ・シンポジウム

2018年2月17日（土）、18日（日）、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）では、キックオフ・シンポジウム「デジタルアーカイブが開く東アジア文化研究の新しい地平」を開催した。シンポジウムでは、国内外からデジタルアーカイブや東アジア文化研究の専門家をお招きし、それぞれに貴重な講演・研究報告をいただいた。

まず初日は、本学学長の芝井敬司の開会挨拶およびKU-ORCAS センター長内田慶市によるKU-ORCASの紹介の後、下田正弘東京大学教授、Hilde De Weerdт ライデン大学教授、Nathalie Monnet フランス国立図書館写本部中国書チーフキュレーター、楊曉捷カルガリー大学教授の4名の方からご講演をいただいた。ここでは、デジタル時代における人文学の課題やテキスト分析のための研究インフラ、電子図書館、デジタル化資料の活用など、多様なテーマが論じられた。

2日目は、日本人研究者6名による研究報告が行われた。KU-ORCAS 副センター長（関西大学 文学部教授）の藤田高夫は中国古代木簡のデータ化による研究手法を提案し、武田英明国立情報学研究所教授は昨今の学術研究を取り巻くオープンサイエンスとオープンデータの動向に

ついて紹介された。永崎研宣人文情報学研究所主席研究員は、研究者向けデジタルアーカイブの構築において検討すべき課題を国際的な動向を交えて論じ、山本和明国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター副センター長からは「歴史的典籍 NW 事業」のご紹介があった。安岡孝一京都大学教授は、ご自身の進めておられる漢字・漢文処理の研究報告を、そして、本学文学部教授の二階堂善弘は、20年続く漢字文献情報処理研究会の活動について紹介した。最後には、聴衆を交えた総合討論が行われ、2日間の充実したシンポジウムは括られた。

いずれの議論も示唆に富み、KU-ORCAS にとってはこれからのプロジェクト推進に向けて大きな指針を与えられたと理解している。今後とも関係各位のご指導・ご協力を賜りたい。

菊池 信彦
(2018年4月 KU-ORCAS 特別任命准教授
着任予定)



KU-ORCASの目指すもの

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター長
内田 慶市

昨今の人文学研究のひとつの潮流であるデジタルアーカイブは、人類の知の遺産の保存という大きな使命を帯びている。私たちはこの使命のもと、貴重書や典籍のデジタルアーカイブ化を進めている。ただし、単にアーカイブ化するだけでなく、新しい研究とタイアップしていく必要がある。中国の漢語コーパスを利用すると、例えば「革命」という語彙の使用がこの60年間のいつごろにピークがあったのかがわかり、同時に最近はこの語彙が使われないということもわかる。これはまさに中国を反映するものだ。つまり語彙史研究は、概念史や思想史の研究と連携できる。デジタルアーカイブのひとつの利点と言えるだろう。

世界に目を向けると、中国が国家レベルで推進しているCADAL (China Academic Digital Associative Library)



や、中国、韓国、オーストラリア、アメリカ等の機関によるPacific Rim Library などの大きなデジタルアーカイブがある。このような世界的な事業に日本は積極的に関与していくべきであるし、KU-ORCASも参加していくつもりだ。

アーカイブ化の課題は「サイロ問題」だ。国内でもデジタル化はいたるところで進んでいるが、それぞれのアーカイブが別々に作られて閉じているため、放っておくと腐ってしまう。こうした状況を打破しなければならない。KU-ORCASはサイロからコンテンツを解き放すことをキーワードにしており、「研究リソース」「研究グループ」「研究ノウハウ」のオープン掲げている。そのためにも国内外の諸機関と連携してオープン・プラットフォームを形成し、東アジア研究の成果を新たな人文知として知識基盤社会に広く提供していきたい。

デジタル・アーカイブ時代における人文学の課題



東京大学 教授
下田 正弘

20世紀後半から世界規模で進行してきた情報通信革命の一躍を担ってきたデジタル化という新たなプロセスにより、学術・産業・社会あらゆる場面で解決不能とみなされてきた様々な問題が解決されるようになった。

デジタル化された資料、テキスト内在性、間テキスト性という三者の密接な関係性に鑑みると、デジタル化のプロセスに関与しなければ、当該学問分野自体が不可視となってしまう。可視化していくためには、デジタルという形態を基礎として、国際標準の構築と共同が必要であり、これを通して研究基盤と成果を交換する場を構築し、交換可能にしていかなければならない。それは、生み出された研究成果が、この場を通して交換をされるときに初めて価値・意味になっていくからである。

現在進行しているデジタル化プロセスは、あらゆる諸科学の外部に外化されて、そこに存在し始めている。このような事態は、今後期待が寄せられる情報学さえも呑み込んでしまうほど巨大な出来事となっている。人文学には、この課題を批判的に適切に受け取っていく責任がある。それは人文学が外ならぬ言語を主題としてきたからである。つまり人文学は、現在生起しつつあるプロセスの内部に入り、そのプロセスの内部から問題を把握していくことが求められているのである。

以上の経緯に踏まえると、関西大学アジア・オープンリサーチセンターにおける東アジア文化研究分野のオープン・プラットフォーム建設、その成果発信のための基盤整備は、現在日本の人文学が直面する上述の課題に真正面から答えようとする試みと言える。

MARKUS, VISUS & COMPARATIVUS: Developing a Text Analysis Infrastructure for East Asian Languages



ライデン大学 教授
Hilde De Weerdт

MARKUSはGoogle Chromeでのみ利用可能なマークアップを有効活用したオープン・プラットフォームの一つである。中国語古典のファイルをアップロードすると、個人名、場所、日付、官職名、血縁関係、その他社会的繋がり、ユーザーにより定義づけられた内容、同時代の関連事項等が自動的に、あるいは手動でもタグ付けされたうえでキータームがリスト化され、有意義にデータが可視化、マッピングされるシステムとなっている。そして、このオープン・プラットフォームは、自動的にタグ付けされたキータームのリストをアップロードすることもできる上に、参照著作を確認しながら史料を読むことができ、同名やキーワードが文章中に出てきた際に、それら文章を比較することもできる。いわば、リンク化された参照史料を包摂する精読ツールであるといえる。

また国立台湾大学が公開している、マークアップの概念を活かしたDocuskyも、MARKUSと非常に高い親和性を持つオープン・プラットフォームである。Docuskyは異なるファイルごとにタグ付けされたデータを統計的に処理することも可能であり、テキスト同士の相似性、概念の差異を浮き彫りにすることを得意としている。

MARKUSは、関係性ごとのマークアップ、すなわち異なる人物同士の異なる関係性や異なる期間、場所などを学習することで、新たな関係性を見つけ出していく。これはMARKUSの最大の特徴であるといえる。現段階では中国語が多いが、ほかの言語に対しても対応可能であり、韓国語、日本語も重視し準備を進めている最中である。

The Gallica digital celebrates its 20th anniversary



フランス国立図書館 写本部中国書チーフキュレーター
Nathalie Monnet

電子図書館ガリカ（Gallica）は、フランス国立図書館のイメージデータベースの名称であり、今年で設立20周年を迎えた。絶え間なく発展を続け、新しくもあり多様な方向性を引き出し続けている、この電子図書館のことを担当部局の局員はガリカの銀河（Callia Galaxy）と、呼んでいる。

電子図書館ガリカは、インターネット上のフリー・デジタル・ライブラリーのなかでも最も大規模な部類に入る。今日、400万点以上もの資料にアクセスすることが可能であり、印刷物、写本、新聞、録音資料、楽譜、地図などのあらゆるデジタルデータが閲覧可能となっている。その一例として、敦煌写本が挙げられる。これは、5世紀から11世紀初頭にかけての文書群であり、その大半が中国語写本である。この中には僅かではあるが、絹に書かれた写本（5世紀）といったものも含まれている。またガリカを通して、フランス国内270の提携図書館のデジタルデータも検索・閲覧することも可能である。

ガリカでは、新聞や音源（1935年に東京で録音された船頭の歌など）をはじめ、続々と新しい資料が追加されている。その一方で、Epub形式での書籍の提供も始まっており、それにより、スマートフォンやタブレットへのダウンロードが可能となることで、容易に新旧の様々なテキストに触れることができるようになっている。またフリーレファレンスサービスも開始され、だれでもインターネットを通じて図書館員に気軽に質問ができるようになっており、総合的にガリカの利便性は俄かに高まりつつある。

デジタル画像が古典画像にもたらしたもの
—「デジタル展示:からいと」の制作を手がかりに—



カルガリー大学 教授
楊 曉捷

古典が古典たる所以は、媒体の形態を超越したところにある。しかしながら、デジタルメディアは、古典を再記録し、新たに伝えるためにかつて存在しなかった方法を提供し、新たな読者を開拓している。国文学研究資料館が公開している「江戸料理レシピデータセット」、京都大学古地震研究会が公開している「みんなで翻刻」などは、古典をより身近なものとし、教育の強い味方として今後活かされていくであろう好例として挙げられる。

その一方で、未だ定まりが見えず、変容が続けるのがデジタル技術であり、新しいものにばかり目を向けるのではなく、変化の現実を受け入れ、消えたものによって達成された知識へのアクセスを確保することが必要であり、進化・成果の保存・点検・継承が絶えず求められているといえる。

審査を経た学術成果は、出版されたその時点から著者の手を離れ、外部に委ねられることにより、はじめて引用可能となる。しかしインターネットでは、絶えず人の手が加えられ、引用するに堪えない状況にある。したがってインターネットでの学術成果の公表にも学問と同様のプロセスが導入されるべきであり、今後はインターネット上において責任を持った第三者の介在、つまり電子媒体を扱う出版社のようなものを生み出していく必要がある。学問の伝統を守り、意図的に新たな環境において再現し、継続させる。研究者個人が知見を追求するのに対して、機関はその努力や成果を促し、守り抜く役目も果たすべきである。

木簡の表情
—中国古代木簡に見る字体と文書の関連性—



関西大学 文学部教授
藤田 高夫

KU-ORCASで行う研究として、研究対象としている中国秦代・漢代の木簡の“文字の崩れ方”を分析し、字体と文書の関係を探りたいと考えている。従来、字体についての本格的な議論は中国ではほとんどなされてこなかった。というのも、中国では木簡が出土すると、書いてあることが活字になってまず出る。材質や文字の書きぶりといった「もの」としての木簡を扱うという視点が希薄なのだ。もうひとつ、字体の違いはわかっても、その崩れ方は見た人の「印象」によって判断されてきた。これでは見る人によって評価が変わってしまう。

そこで、文字の崩れ方の定量化を試みたい。最も謹直な字体から崩れた字体まで5段階くらいに分け、大量の木簡から文字を一字一字切り出していく。頻出する文字をピックアップして集積し、その文字にレベル1からレベル5までを付与し、それぞれの文字が使われている木簡の複数の文字レベルの平均値を算出して、その文書全体がどのレベルにあたるのかを決める。

こうした研究で何が得られるのか。まず、謹直な文字か崩れた文字かというのは、内部文書と外部文書の違いを反映していることが予想される。さらに、外部文書が大量に出るところと内部文書が大量に出るところでは官署のレベルが違っていると推察され、そこから文書行政におけるターミナルが実態的に把握できる。そしてもうひとつ、作業の過程で大量の文字画像が集積されるため、デジタル版の木簡辞典を作ることも可能だ。このように、デジタル化とその解析によって、今の木簡研究の議論をさらに深めていけると考えている。

オープンサイエンスとオープンデータ
—ちょっと先の研究のあり方を考える—



国立情報学研究所 教授
武田 英明

社会と科学のデジタル化・インターネット化に伴う科学の新しい形として、近年耳にすることが多いオープンサイエンス。これらは、特にインターネットのオープン性が強く反映しており、科学、学術出版、政府、市民科学のデジタル化・インターネット化という複数のルートから科学のオープン性が成立している。オープンサイエンスは、デジタルメディアを用いて、科学者間、分野間、科学者・市民間の境界において、多様な科学の担い手の出現や多様なコラボレーションの実施といった科学のプロセス、あるいはデータのオープン化と共有といった科学の成果に関する無境界化（ボーダレス化）を実現する。

研究活動のデジタル化及びID化が進行する上で、研究のプロセスにおいては、データの共有と公開、そしてデータのライフサイクルへの視座が必要不可欠となる。研究上のデータは、オープンサイエンスにおいて重要な基盤のひとつであり、研究サイクルにあわせて共有、公開、保存される。なお、データ公開に際しては、「見つけられる」「アクセスできる」「相互運用可能」「再利用できる」ことを重視するFAIR原則に基づき遂行されるべきであり、さらに、研究データ共有のアーキテクチャにおいては、識別子とメタデータの重要性に鑑みてDOI (Digital Object Identifier) やジャパン・リンク・センター (JaLC) の利用、また（メタ）データのネットワーク化や、データ同士がデータセット内あるいは他のデータセットのデータと繋がることのできるLinked Dataによるデータの利活用が推進されるべきである。

研究者による研究者のための
オープン・プラットフォームに向けて
——機械ではなく人が決めるルールの
集積としてのデジタルアーカイブを通じて——



人文情報学研究所 主席研究員
永崎 研宣

学術情報流通が紙媒体からデジタルに移行している昨今、デジタルアーカイブを構築・利用するにあたっては、ユーザーのターゲット層の定義や、その作業を行うシステム開発者とデータ提供者との関係性などといった、様々な課題を踏まえて推進していく必要がある。

その上で、東アジア研究に関連するツールとしては、各分野の専門家集団が定めた標準的な規格 CIDOC-CRM（ミュージアム）、ISAD（G）（文書館）、FRBR（図書館）といったものがすでに用意されている。また、文字に関しては、国際標準規格である ISO/IEC10646 が多様な文字を提供するようになっており、それに準拠する Unicode を用いることが現状では望ましいだろう。資料の詳細な構造化については TEI（Text Encoding Initiative Guidelines）、Web 画像等のコンテンツ共有には IIIF（International Image Interoperability Framework）によって共有を行うことが効率的だろう。人文系研究が低コストで持続的なデジタル研究基盤を維持していくには、そうした規格を分析しつつうまく利用していくことで、今後の研究基盤の充実や拡大をはかる必要がある。

その一方で、日進月歩のデジタル技術が媒体の在り方をグローバルに変え続けていく時代においては、研究資料がどのようにして扱われるべきか、常に問い直され続けることになる。そのような状況において、東アジア文化研究の新しい地平をオープン・プラットフォームとしてのデジタルアーカイブが開いていくためには、標準的な規格に準拠した技術開発・システム構築・データ作成だけでなく、グローバルな視野のなかでの東アジア文化研究という観点から資料と研究の関係を常に根源的に問い直し、必要に応じた拡張・改良も視野に入れた標準的な規格の策定への参画も必要となっていくだろう。

歴史的典籍NW事業:
その現状と目指すべき未来



国文学研究資料館
古典籍共同研究事業センター副センター長
山本 和明

近年、Web 環境が研究手法を変える時代へと突入している。そのような中、世界規模でのデジタル化（研究環境の整備）の中で、日本の立ち後れを危惧し、国文学研究資料館では2014年から人文社会科学分野初の大規模学術フロンティア促進事業「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画（略称：歴史的典籍 NW 事業 NIJL-NW project）をスタートさせた。歴史的典籍 NW 事業は、10年間で（1）30万点の画像データを作成し、あらゆる分野の古典籍の全冊画像を Web 上で公開すること、（2）国際共同研究ネットワークの構築を行うこと、（3）異分野融合研究や総合書物学など国際共同研究の推進を行うことを目標としている。

唯一の日本古典籍ポータルサイト「新日本古典籍総合データベース」において、タイトルやキーワード、画像につけられたタグやピックアップコンテンツなど多彩な方法での検索が可能である。また、同サイトでは、クリエイティブコモンズ表示による利用手続きの明確化を推進するほか、電子データに付与される国際的識別子 DOI の採用により、永続的なアクセスが保証されている。さらには、画像共有の新しい標準 IIIF を採用することで、ストレスフリーに閲覧できる点も大きな特徴である。

2017年10月からは、CiNii Books の検索結果画面から、新日本古典籍総合データベースの古典籍の本文画像に直接アクセスし、閲覧することが可能になったことに加え、2018年中には Japan Knowledge との連携実現する予定であり、世界からも検索できる繋がるデータベースのさらなる確立を目指している。

東アジア人文情報学研究の現在
——漢字処理から漢文処理へ——



京都大学 人文科学研究所附属
東アジア人文情報学研究センター教授
安岡 孝一

古典中国語（漢文）のコンピュータ処理に際し、テキストの自然言語解析という側面から報告を行った。古典漢文のような単語間に切れ目のない書写言語の解析では、単語を認識した上で単語間の関係について解析しなければならず、テキストの形態素解析を行った上で、係り受け解析を行うというやり方が必要となる。京都大学人文科学研究所共同研究班「東アジア古典文献コーパスの実証研究」では、古典漢文に対する係り受け解析の研究に取り組んでおり、今回は、古典中国語に対する形態素解析と、言語横断的な依存構造記述としての Universal Dependencies（以下 UD）2.0 の適用について、報告を行った。

同研究班では、UD 漢文の形態素解析について4層層の品詞体系を独自に定義し、約46,000文の MeCab 漢文コーパスと、約6,000語の MeCab 漢文辞書を製作した。これにより、一般的な漢文（散文）は高精度での形態素解析が可能となる。また、UD 2.0 の UD 品詞の漢文への適用については、MeCab 漢文形態素解析で用いる品詞体系から、14の UD 品詞への自動変換を可能とした。UD 依存構造については、Pulleyblank の古典中国語文法書の各例文について、手作業で UD 依存構造を決定することで、32種類の UD 依存構造タグが漢文の構造記述に必要となることを明らかにした。ただし、UD 形態素属性については、MeCab 漢文形態素解析との齟齬が大きい。UD 形態素属性は、屈折語の文法的機能を表すものが多く、孤立語である古典中国語には使えない。ただし、UD 形態素属性は、各言語での提案が可能のため、今後は MeCab 漢文形態素解析で使用している意味素性・小素性を、UD 形態素属性に含めていく方策を模索する方向である。

漢字文献情報処理研究会と
研究者コミュニティ



関西大学 文学部教授
二階堂 善弘

私が代表になって活動してきた漢字文献情報処理研究会（漢情研/JAET）は、東洋学分野におけるコンピュータ利用の研究紹介および関連情報の交換を目的に1998年に設立した。（現在の代表は異なっている。）当時はコンピュータを東洋学に活用するという試みはほとんどなく、またコンピュータ自体も非力で、使える漢字が少なかった。“人文学研究者にどのようにしてコンピュータを使ってもらうか”を探るのが、当時の私たちの使命であった。この20年間、ノウハウ本の出版やフリーフォントの作成等、様々な活動を行ってきた。

研究会の当初の会員は中国文学や中国哲学、仏教学の研究者が主体だったが、言語を扱うことから中国言語学の研究者も参加するようになった。また、著作権の問題では法律家の協力を得る必要があった。活動を進めるなかで研究者コミュニティが多様な分野に広がっていった。しかし一方で、せっかく出来上がったコミュニティを継続していくことの難しさも感じている。シンポジウム等のイベントを行っても、そのとき限りの関係で終わってしまうことも少なくない。こうした経験を経て思うのは、インターネットが発展しようが、便利なコミュニケーションツールができようが、顔を合わせて話し合う関係には勝てないということだ。デジタル情報時代になって、むしろ研究コミュニティは集中化する傾向にある。こうした研究コミュニティはそれぞれ優れた研究やデータを持っているが、活動が終了するとそこで終わってしまう。これらの成果を活かせる場が必要だ。KU-ORCAS で、なにかそうしたつながりが新たに作れないかと考えている。

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）の概要

文学部教授 二階堂 善弘

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（Kansai University Open Research Center for Asian Studies：KU-ORCAS）は、文部科学省の2017年度「私立大学研究ブランディング事業」タイプB（世界展開型）によって採択された事業「オープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究」に基づいて設置されました。

大阪の漢学塾であった泊園書院の旧蔵書を基礎として1951年に設立された東西学術研究所は、一貫して人文学の研究拠点であり続け、多くの研究実績を産みだしてきました。この東西学術研究所のもとに、「文化交渉学研究拠点（ICIS）」が置かれていますが、これは2007年度採択の文部科学省グローバルCOEプログラムによって設置されたものです。また2011年に文部科学省「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」の採択を承けて組織された「関西大学アジア文化研究センター（CSAC）」では、関西大学の研究資料のアーカイブ化を中心に研究活動を行ってまいりました。

こういった過去の業績をふまえ、新たに2017年度より、関西大学の東アジア研究の拠点として関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）が発足しました。KU-ORCASでは、研究リソースのオープン化、研究グループのオープン化、そして、研究ノウハウのオープン化という「3つのオープン化」を目指します。

研究リソースのオープン化ですが、リソースのデジタル化は、人文学関連の資料保存という目的にとどまるものではなく、それがインターネット上で公開されることによって、資料へのアクセスを劇的に改善する効果を持ちます。こういったリソースをデジタル化し、多くの研究者にインターネット上において提供することでリソースの共有化を行います。また他機関の研究リソースとの連携を図り、「東アジア文化研究とデジタルアーカイブのネットワーク・ハブ」を目指します。

研究グループのオープン化については、研究組織を関西大学の内部のみにとどめるのではなく、各自の専門領域に応じて広げ、また他機関のリソースを使いやすくできるよう、協力関係を強化していきます。さらに、研究ノウハウのオープン化では、関西大学における研究のノウハウの共有化を図っていくことを心がけます。

KU-ORCASでは、まず以下の3つのユニットを中心に、研究活動を進めていきます。

●ユニット1：東西文化接触とテキスト

●ユニット2：東アジアの中の大阪の学統とネットワーク

●ユニット3：古都・史跡の時空間

ユニット1の「東西文化接触とテキスト」においては、東西学術研究所及びグローバルCOEプログラムにおける東西文化交流史の研究成果を踏まえて、本学所蔵の東西言語接触に関わる資料を中心としたアーカイブを構築していきます。また「近代漢語語彙コーパス」の整備も行います。

ユニット2の「東アジアの中の大阪の学統とネットワーク」では、本学の学統の源流たる泊園書院に関する総合アーカイブ「WEB泊園書院」を構築します。そこでは「泊園文庫」を中心に、典籍・日記類・院主作成碑文等のデジタルアーカイブ化を進め、泊園書院の学術の全貌を明らかにしていきます。また「近世大坂画壇コレクション」のアーカイブの構築を進めていきます。

ユニット3の「古都・史跡の時空間」では、高松塚古墳の発掘に象徴される本学の古代飛鳥・難波津研究が蓄積してきた発掘データ・出土物データ・図面等をデータベース化するとともに、新たに飛鳥時代の墳墓の調査を行い、成果展示会を開催し、これらを総合したアーカイブを構築していきます。

ただ、すべてのスタッフがこの3つのユニットに参加するわけではありません。KU-ORCASでは、有機的、かつ複合的な研究ユニットの形成と組み替えも想定しています。今後、いくつかのユニットが試みられる予定もあります。また、関西大学アジア文化研究センター（CSAC）において構築されたいくつかのアーカイブについても、新しいプロジェクトに合わせての再構築を企図しています。

KU-ORCASでは関西大学以文館を主に活動の場としますが、こちらに研究者コミュニティのためのスペースを設けて、外から訪れる研究者への便を図ります。KU-ORCASでは様々なデータベースを購入して研究目的に使用しますが、その多くは残念ながらKU-ORCASの内部でしか使えません。しかし、なるべく多くの研究者に使用してもらうために、共有スペースを設けて、そこで自由にデータベースを使っていただくことにしたいと思います。

ユニット1

東西文化接触とテキスト



外国語学部教授
奥村 佳代子

「東西文化接触とテキスト」をテーマに、この研究領域のさらなる開拓と進展に資するため、デジタルアーカイブの整備と充実に取り組んでいます。

まず第一に、本学は長年に亘り西洋人による中国語辞書、中国語文法書、宣教師報告書等の文献を収集しており、量、質ともに充実した蔵書は、世界に誇れる内容です。これらは東西言語文化接触を代表する資料であり、アーカイブの中核を成すものとして位置づけられます。

また、本学総合図書館及び研究所の個人文庫は、漢

学や国学に関する資料を豊富に所蔵しており、なかには世界的に珍しい資料も含まれます。特に、近世後期の国学者岩崎美隆の学問の総体である岩崎文庫、長崎、琉球を中心とした中国語資料を有する長澤文庫、近世日本の中国文学受容の歴史を反映する資料が豊富な中村幸彦文庫、近代以降の中国語教科書が網羅された鱒澤文庫を中心に、アーカイブに組み入れます。

本ユニットの最終的な目標は、個々に分散している資料を精査したうえで、東西言語文化接触に関わる資料として再編成し、国内外の諸機関と相互にリンクしたアーカイブを構築することであり、東西言語接触研究と東西文化交渉研究の拠点となることを目指します。

ユニット2

東アジアの中の大阪の学統とネットワーク



文学部教授
吾妻 重二

ユニット2では、まず本学の学統のルーツをなす「泊園書院」に関する総合アーカイブ「WEB泊園書院」を構築します。本学総合図書館所蔵の「泊園文庫」を中心に、典籍（手稿本を含む）・日記類・院主作成碑文等のデジタルアーカイブ化を進めます。同時に5,000人を超える門

人データベースを完成させ、学問を通じて形成された実業界とのネットワークを再現します。また懷徳堂や

咸宜園、松下村塾などの漢学塾、混沌社や梅花社などの詩社との比較研究も行う予定です。

これと並んで、本学が数多く所蔵する「近世大坂画壇コレクション」を中心に国内・海外に散在する大坂画壇作品を含めたデジタルアーカイブを構築するとともに、これらを一堂に会した展示会を開催します。

古来、大阪の地は中国や朝鮮、台湾など東アジアと航海を通して結び合う港口として発展し、それら海外文化をいち早く受容してきました。本ユニットは大阪で発達した諸学芸の姿を、東アジアとの直接・間接的ネットワークの中で解明する展望に支えられています。

ユニット3

古都・史跡の時空間



文学部教授
西本 昌弘

このユニットは、飛鳥・京都など日本の古都を形づくってきた地域の歴史を掘り起こし、この地域の史跡や文化遺産に関わるデータベースを構築することを目指します。本学には、高松塚古墳の発掘に象徴される古代飛鳥研究、なにわ大阪文化遺産学研究センターなどが推進し

てきた古代～近世の難波・大坂研究の大きな蓄積があります。これらが蓄積してきた発掘調査データや出土

品データ、拓本資料データ、絵図資料データなどを集成してデータベース化するとともに、新たに飛鳥時代の墳墓の発掘調査を実施し、その成果を展示会などの形で広く紹介します。

あわせて、本学総合図書館が所蔵する岩崎美隆文庫本・内藤文庫本・泊園文庫本・本山文庫本をはじめとして、淀川流域や京都郊外の都市に関する古文書・古地図・寺社境内図などを調査し、この地域の歴史空間復原の手がかりを集めます。古代～近世を中心とする飛鳥・難波・京都の時空間復原データベースの構築が本ユニットのめざすところです。